

# 『一人残らずすべての児童が「安心」して過ごせる学校』

## 《 教師達へ 》

国頭学びの会ゆい

学校の機能（システム）は、「子ども達のために」向けられて初めて学校の目的と役割を担うことができたこととなる。多様化する各家庭の中で、我慢や辛さを強いられてそれを乗り越えて学校に「安心」と「私の居場所」を求めて登校してくる子もいる。普通という言葉は基準として設定されるが、その「普通」の基準レベルも家庭において様々である。さらにその普通を超えた特別な例外も存在することを受け入れる必要があり、その事実を受け入れる教師の器が要求される。

学校は「人格の形成、平和（安心）で民主的（平等）な国家（学校）の形成者の育成」を目指して子ども達が健やかで豊かに育つ場所であることが大前提である。しかし学校や教室がその目的や理念からゆがめられ、「教師にとって都合のいい経営」に向けられたとき、その学校と教室は困難を抱えることになる。（教師のアポリア、教室のジレンマ）

単純に賞罰で子ども達を動かしたり、教師の威圧や、集団行動を名目にした統制型の指導は、指導した教師の目の前でしか通用しない。翌年に子ども達を任せられた教師には苦勞だけが引き継がれることになる。中学校に行ったとき「威圧」や「怖さ」による抑圧はかえって生徒の反発を招き、生徒の心を真逆に刺激してしまう（中学校の教師達の嘆きとなる。）

学校に通うすべての子ども達が安心してその苦難や嘆きを語り（心を開き）、教師や保護者、地域の人がいっしょにその困難の解決に向かい、互いが成長し合えるそんな「安心」できる学校創りに正面から向き合うことを教師の使命の一つと考えたい。

そのために以下



- ☆ 子どもの「家庭」の愚痴をこぼさない。  
子どもの現実を受け入れる。
- ☆ 家庭でできないから学校がある。  
家庭の困難を学校で乗り越える。
- ☆ 弱い子どもの背景には、さらに弱い親がいる。  
親の弱さから子どもを引き受ける。
- ☆ すべての子どもを受け入れる。  
すべての職員が受け入れる。
- ☆ 学校のおかげで育つ子を見とどける。  
成長を語れる教師になる。
- ☆ 「注意！」よりも「声かけ」を心がけましょう。